

井上 泰（千葉・製品安全コンサルタント）

1. 諸言

今までの弊職の研究は、情報収集から意思決定に至る（実行に移る前の）プロセスにおいて人の行動変容を促すものであった。このベースの考え方は、情報を選別し有益な情報を認知し行動に移すという認知行動プロセスを基に行動までの判断に影響する各種要素に係る物であった。

今までは、計画を実行する前に多くの情報を集め、情報個々を自身で判断することに多くの時間を割いていた。場合によっては判断するために改めて情報収集をするなどの複数のプロセスを経て行動に移っていた。そのため、その判断プロセスにおいて安全な方向に行動変容を促すチャンスがあった。

しかし、AI活用による旅行や外出が急速に普及し、AIが推奨するプログラムを優先的に採用するケースが散見されるようになった。

AI活用による旅行や外出の判断は、「AIへの出問いかけ」→「AIの提案」→「自身で評価」→「行動」という「AIの提案を楽しそうかどうかを評価し、良ければ行動に移す」という行動判断傾向に移行しつつある。そのため、行動変容を促すチャンスは著しく減少する傾向にある。

従来の行動変容に関するアプローチでは、このような変化に対応ができない。改めて水難事故防止を社会実装するために「実装科学」の活用が可能であるか検討を行った。

2. 方法

「実装科学」は、エビデンスを現場や政策に生かす戦略を研究している学問である。様々な分野で実装のエビデンスが収集されその実践評価がさらに追加され、いまだ研究発展段階の科学である。

本研究では、代表的な手法を任意で選択し、実際に水難事故の予防を社会実装するためのメリット・デメリットを評価し活用可能性を検討した。

具体的には、本学問で研究された複数の理論や戦略がどのように実践されたかを評価し、水難事故防止の対象者にエビデンスを社会実装することが可能であるかを検討した。

3. 結果と考察

代表的な手法のほとんどは、実装結果の評価を最終プロセスに置いている。しかし、一般市民に実装の確認を取ることは事実上困難であった。一方、行政が一般市民へ実施した理論である「TDF」は、人々の行動を理解し介入する理論である本検討に親和性があると評価した。これに、イノベーションの視点を考慮することで、一定の効果が見込める可能性があると考えられた。

表1. 一般的に使用される実装理論とフレームワーク

理論・フレームワーク	特徴	適用
Consolidated Framework for Implementation Research (CFIR)	イノベーションの普及理論に基づいており「計画された介入」「実装活動が行われる即時的及び広範なコンテキスト」「関与する個人」「実際の介入を提供するプロセスに関連する構成概念」を表している。	実装アウトカムに影響を与える要因の理解と説明実装の評価に用いられる。
COM-B	エビデンスに基づく実践や公衆衛生の実装は行動変容に依存しており、行動は「能力」「機会」「動機」の3つの要素の相互作用によって生じる。能力と機会は動機に影響を与え、行動をとることで再びこの3要素が変化する。	
Promoting Action on Research Implementation Health Service (PARiHS)	成功する実装は「エビデンスの強さと性質」「適用するコンテキスト」「実装の促進（ファシリテーション）」の3つの中核構想概念の相互作用の結果。	
Normalisation Process Theory (NPT)	新しいプロセスが日常業務にどれだけ定着するかを理解するための理論。個人と集団レベルの実装作業を「意味付け」「認知的参加」「集団的行為」「再評価」の4つの構成要素からなる。	
RE-AIM	公共衛生・健康促進研究一貫した報告のために開発された。インパクトと持続性に重要な「到達度」「有効性」「採用度」「実施度」「維持度」の構成概念に基づく計画・評価フレームワーク	
Theoretical Domains Framework (TDF)	128の理論的構成概念を統合した理論フレームワーク。14の領域に整理され、行動に与える構成概念を示す。	実装アウトカムに影響を与える要因の理解と説明に使用。

表2. イノベーションの5つの視点

構成概念	定義	普及速度との関係	普及計画と実践への適用
総体的優位性	どの程度優れていると認識されているか	認識される利点が大きいほど普及が早まる。	実装したい取り組みを分析・理解・強調して伝える。
互換性	経験・価値観・ニーズと一致していると認識されているか	互換性が高いと認識される。(普及が早くなる)	実装したい取り組みが、利用者の日常的な実践・ニーズ・価値観・社会的規範とどのように一致し、または矛盾しているかを考慮し、矛盾の解消を試みる。
複雑性	複雑であると認識されているか	複雑性が増すと普及が遅くなる。	利用者が実装したい取り組みを採用することをどの程度複雑だと認識するかを考慮し、資料等を通じてその取り組みをより簡単に感じさせる方法を検討する。
観測可能性	他人がその効果を観測できると認識されているか	観測可能性が高まると普及が早まる。	実装したい取り組みを採用することで得られる利益が採用者自身やその仲間にもどのように見えるか、特に短期的な視点でどのように示せるかを検討する。その利益を簡単に測定できる方法をどのように伝えるかを検討する。
試用可能性	試しやすいと認識されているか	試用可能性の認識が高まると普及が早まる。	実装したい取り組みの採用後にそれが望ましくないと認識された場合現状に戻れるような仕組みを検討する。